
に崇りなし -- Far from Jupiter, far from thunder...?

和波智淳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触らぬ神に祟りなし - Far from Jupiter ,
far from thunder . . . ?

【Nコード】

N4856E

【作者名】

和波智淳

【あらすじ】

「暇な奴らの日常生活」の続編のようなもの。知性を切らし、腹をすかせた獣人再び。しかも今度は二頭。……さあ、どうする!?

「どうしよう、ね？」

リヴァイヴァは出来る限り声をひそめて問いかけた。

「どうしよう、か」

答えるガッツも、普段ほど無造作な口調ではなくなっている。

「どうしようと言ったところで、どうしようもない状況なのは確かだがな」

「何でこんなめんどくさい事になっちゃったんだろう……」

リヴァイヴァの返事はもう泣き言に近かった。

その口調が多少なりとも耳を打ったのか、話題の中心にいるものが、ぴくりと耳を動かした。リヴァイヴァもガッツもぎよっと注目したが、反応はそれきりで、後はひたすらのんきそうな顔で、ひなたぼっこ兼昼寝を続けている。

その様子を見計らって、リヴァイヴァがそろそろとガッツを振り返る。

「……ねえ、本当にどうしよう、あれ？」

「普段ならばエサで釣るといふ手も使えるが……」

ガッツは細い目でその方を盗み見るように見やる。

「無理だな。この状況は俺たちに経験がない上、不安要素が多すぎる」

「こっちはまだしも行動が読めるけど、あっちがどういう過剰反応を起こすか分からないからね……」

ガッツとリヴァイヴァはもう一度不安の根本原因の方を見やり……期せずして、同時に軽い溜め息をついた。

その溜め息を聞き付けたか、それとも視線を感じたか。彼らの視線の先にうずくまるものがまた反応を示す。

ぐあーあっ……とのんきなあくびをして、峨峨と鋭い歯と太い牙が並び口内を見せつけたのは、虎とライオンの中間のような頭、人

に近い体つきをした大柄な生き物だった。たてがみは比較的短く、炎色の地に黒い縞模様が入っているが、他は全身、薄い縞模様の入った金色の毛皮に被われている。掃き出し窓越しにうらうらと射す陽光がその金の毛並みにちらちら揺れて、まるで陽炎でも立っているようなあんばいだ。そうやってもっとも陽当たりのいい床の上に陣取り、両目を心底気持ち良さに細めて、昼寝を満喫しているのである。

そして 同時に、尻尾の先をしゃらりと動かしたものがある。それは、人獅子虎に寄り添うように というより、その体の陰に身を縮め、陽光を避けるようにしていた。体つきはやはり人に近く、その大きさは傍らの人獅子虎に匹敵する。全身はかすかに青みを帯びた黒、金属的とも生物的ともつかない艶やかな光沢に覆われて、硬質の装甲を纏っているように見える。

姿かたちも、猫族のしなやかさをもつ人獅子虎とは違い、どこことなく刺々しい。もっとも目立つのは、烏羽色の長い髪の中に生えた一対の金色の角だろう。体の後ろに長く伸びる尻尾の先端にも、柔らかなそうな毛のふさを取り巻くように、3本の鉤爪がついている。尻尾の先を震わせるたびにこの鉤爪が触れ合い、しゃらしゃらと音をたてるのだ。

いずれの生き物も、今はのびのびと体を伸ばし、あるいは柔らかく身を丸め、陽だまりの中に落ち着いて微睡んでいるかに見える。……だが、ガッツもリヴァイヴァも知っている。人に似て人の倍近い体格を持つその生き物たちが、その体に見合うだけの膂力と生命力を持ち合わせていることを。そして、生肉や生き血を見ると目の色が変わり、腹具合によっては、人間をも「餌」と認識する傾向があることを……。

人獅子虎のほうだけならば、ガッツもリヴァイヴァも慣れた相手だ。エサでもやって手なずけて、大人しくさせておく自信はある。もう1体のほうだけであっても、まだ対処のしようはある。人獅子虎に比べればはるかに獰猛な相手だが、刺激しないようにすればや

り過ごせるはず。

だが、今、彼らの目の前にいるのは、人を上回る体躯と身体能力を備え、人間すら獲物と見なす肉食の生き物が2頭。……そう、2頭、なんである。

「……それにしても、何をどうすりゃ、ここまで面倒なことになるんだろ？」

「現在の状況に至った過程を再検討してみるか。……まず、あいつが訪ねて来たのが昨日。そこで昨日の晩飯は、この部屋で酒盛りのようなことになったな」

「うん……それで、俺は飲まないから早めに切り上げて、後片付けを始めたんだけど、あの二人はまだずっと騒いでたんだっけ」

「俺も途中までは付き合ったがな。だが、標準時の22時台だ。お前に、最後までこの連中に付き合う必要などないから寝ると言ったな」

「うん。で、ガッツさんもその時寝たよね？」

「ああ。……だが、こいつらはまだ飲めや歌えの真っ最中だった。その後のことは俺にも不明だ。で、今朝、俺たちが起きてみるとこくなっていたわけだが……。つまり昨夜の乱痴気騒ぎの末に何かがあったと、ここまではありきたり過ぎて思わず捨てたくなるような推測だな」

「でも、それが普通の推測なんじゃない？ 問題は何が原因だったかだよ。……でも、やっぱ、飲みすぎ食べすぎで理性を切らしちゃったつてのが、可能性としては一番高いよねえ」

「ああ。確かにそうだが……おい」

言葉の途中でガッツが不自然に固まる。いぶかしく思ったリヴァイヴアは、ガッツの視線の先を何気なく振り返った。

そして硬直した。

じーーーーっ。

いちめん若草色の虹彩の中に、小さな瞳孔だけがぼつりと黒い目が2つ。血のように紅い地の中に、金色の虹彩が鮮やかな目が3つ。

「いったい、いつの間にも目を覚ましていたのだろうか。若草色の両眼の人獅子虎と、金と赤の両眼に加え、額の中央にも一つ、同じ色合いの眼をもつ黒い生き物。2頭の獣が頭をもたげ、合計5つの目玉を開けて、2人の擬人を凝視していた。」

「彼ら」がもし理性を保っていたならば、その視線にはわずかなりとも友好の。あるいは信賴の情が含まれていたはずだ。しかし……無感動に注がれるその視線に、リヴァイヴァはぞくりとするものを覚えた。冷酷というわけではない。ただ、相手が獲物か敵か、無害か危険か、獣なりの価値観に照らして見定めようとする視線。そして、ひとたび敵か、危険か、あるいは獲物と判断すれば、容赦なく襲いかかるうという意思。」

「……く、食い物の話をしたのがまずかったかな……!?!?」
下手に視線を反らすこともできず、2人は獣たちと見合ったまま、かすれ声で会話を交わす。」

「いや、食い物の話ならば、さつきからずっとやっていただろう。むしろ俺たちの会話がうるさくなって目覚めたと考えるのが妥当だ。しかし……まずいな」

「なにが!?!?」
「食い物という言葉に反応している。下手をすると……俺たちが食われるかもしれん」

言われてリヴァイヴァも気づく。獣たちの目が、先ほどよりもわずかに、しかし、確かにららんと輝きを増して、自分たちを見つめていることに。」

「……だ、だって、俺たち擬人だよ!?!? 食ったっておいしいわけなんかないじゃんか!?!?」

「その通りだ。だが、動物並の頭でそれを理解しろと言っても無理かもしれん。奴らが俺たちを見た目で人間と判断しているとしたら
はつきり言って、どうしようもない」

「どうしようもないって、そんな落ち着いて言ってたってどうしようもないじゃん!?!?……そうだ。獣化しても精神感応は使えるはず」

だよな？ 俺たちがおいしくないつて伝えてやれば……」

「通じるか？ 相手は動物並の知能だぞ」

「これでももともと人間なんだから、全然通じないってことはないよ！ とにかくやってみない事には……」

「うるうる……」

思わずガッツに向き直つて熱弁をふるおうとしたリヴァイヴァの耳に、かすかな唸り声が届いた。

「……え？」

振り返つたりヴァイヴァの目と、静かに燃える緑の炎のような目がぴたりと重なつた。

人獅子虎が四肢を床につけ、伏せた姿勢からじーっとリヴァイヴァを見上げている。わずかにもぞもぞ動く腰の向こうで、右に左にびゅんびゅんと激しく振られる虎縞の尻尾。一見、先ほどのだらしなく寝転がった格好と大差ないように思えるが、これは……獲物にはつきりと狙いをつけ、襲いかかる好機を窺う体勢に他ならない。

その傍ら、鬼か悪魔かと思まごう凶悪な姿をした黒い生き物も、醒めたような3つの目を2人の擬人にじっと据えている。ただ、それだけのはずなのに、見られた者の身を凍りつかせ、金縛りに陥れる何かがその凝視にある。絶対的な捕食者が、哀れな被食者を意のままにする恐るべき視線

「……っ……！！」

リヴァイヴァはもはや声も出せない。

「……し、視線を反らすな。気を散らした途端にかかつてくるぞ……」

……！！」

ガッツもそんな意味のない助言を口走ることしかできない。

時間も空間も凍結した。どれほどの時が過ぎたのか 正確極まりない擬人の内蔵時計をもつてしても数えられなかった。

やがて……ふい、と目を反らしたのは、黒い生き物だった。そのまま、いかにも興味をなくしたようにガッツたちに背を向け、くてくてとうづくまる。その動作の一部始終を眠たげな目で見守ってい

た人獅子虎も、同調するように頭を前脚、ではなく腕の間に落とす、目を細めてひなたぼっこを再開した。

「……な、何があったの？」

固まった体を一つ、一つ動かし、リヴァイヴァはおずおずとガッツに問いかけた。

「……さあ、何だか分からん。……だが、先に目を反らしたのは奴だったな。奴の方が鼻がきくだらう。臭いで俺たちが人間でないことに気づき、興味を失ったのかもしれない」

「じゃあ、もう、……食べられない？」

「可能性はある。だが……襲われる可能性がなくなったわけではない。食い物がどうかと、危険かどうかは別だからな。俺たちが危害を加えると判断すれば、やはり襲ってくるを見た方がいい」

「じゃあ……」

「やはり刺激しないことだな」

「そう言われたって……」

リヴァイヴァは困惑した。自分もガッツも起きてからこっち、あの獣たちのおかげで身動き一つできない状態である。だが、腹が空けば食事をしないわけにはいかないし、いつまでも寝た時の格好のまま突っ立っているわけにもいかない。刺激すると言われても、どうすればよいのか。

一つ、考えられるのは、2頭が熟睡するのを待つことだ。リヴァイヴァが見る限り、どちらもずっと微睡んではいるが、決して本当に寝てはいない。しかし、いずれは奴らもひなたぼっこに飽きる。その時、餌を求めて行動を起こすか、本格的な昼寝に移るかは不確定だが、もしも眠ってくれば好都合。

そう考えて、リヴァイヴァは獣たちの方を盗み見る。

人獅子虎のほうはと見ると、わずかの間にずいぶん長々と伸びきっていた。警戒心もなく手前に腹を見せて横臥し、四肢をだらんと投げ出している。が、獅子にしては貧弱なふさのついた虎縞の尻尾の先は、まだ寝るには早いとでも言うように、ふらり、ぱたりと

うねっている。

一方、人獅子虎が占有面積を広げたせいで押し退けられた黒のほうは、心なしか迷惑げに陽だまりの隅にうずくまっていた。恐るべき3つ目は既に閉じているが、頭の近くで動く人獅子虎の尻尾が気になるのだろうか、時おり、ビロードのように細かい毛に被われた尖り耳を、ぱたりと振ったり、戻したりする。

いずれにしても、2頭が眠り込むにはまだ時間がかかりそうだった。当人たちはほしいままに振る舞って気楽だが、見守るリヴァイヴァたちは気がでない。できれば早く人並みに戻ってほしいもんだよ……と、リヴァイヴァは恨みがましい気持ちで、ぴくぴく動く人獅子虎の尻尾を眺めた。

もちろん、尻尾は……というか尻尾の持ち主のほうは、そんな傍らの者の気持ちなど知る様子もない。ただ、視線を感じてどことなく居心地悪くなったか、尻尾の動きが大きくなった。こっちに丸まり、あつちに反り、太ももに乗っかり、床にのたうち……

充分にしながら勢いのついた人獅子虎の尻尾は、ちょうどそこにあった黒い生き物の顔面を、ぱしつと音を立てて引っぱたいた。

「あッ……！」

思わず声を上げたのはリヴァイヴァ。隣では、無表情のまま固まったガッツの顔から見る間に血の気が引いている。

……対して、屈辱的な一撃を受けたはずの黒の獣は、唸り声一つ上げなかった。しかし、うつすらと両目を開けたかと思うと、一瞬、底光りのする目で人獅子虎を睨みつけ

「あ……」

リヴァイヴァが声を上げるよりも素早く

人獅子虎の尻尾をぱくつと噛んだ。

本気で噛めば柔らかな尻尾など容易く噛み千切る力である。しかし、そうはならなかった、ということとは、手加減するだけの自制心は残っていたのだろう。とは言え、噛まれた方に見れば、痛いことには変わらない。

「ゴ・オオオンツ！！」

「ガオオオツ！！」

たちまち2頭の獣は四肢をついて飛び起き、互いに身構えて吠え声を浴びせあった。いずれも獣の怒りに目をぎらぎらと燃やし、鋭すぎる牙と鉤爪を剥き出し、剣呑な唸り声を上げて睨み合う。

即座に噛み合いに移らなかつたのは、互いの力量を知って、引き裂きあえばただでは済まぬと悟つたか、それともやはり仲間意識があつて、本気の喧嘩はしないのか。いずれにせよ獣たちの怒りは発散されることなく互いに集中し、次第に密度を増し、両者を包む空間までもじりじりと緊張に焦がしていく。だんだん逆立っていく2頭のたてがみは、まるで目に見えないはずのそれが実体となつて現れたかのよう。

「あわわわわわ……」

ガッツとリヴァイヴァはただもう蒼白となつて獣たちの対峙を傍観している。歯の根が合わないで出る声が、互いの存在のみに集中した獣たちの耳に入っていないのは幸いというべきだろう。もしも自分たちの声が、動きが、あるいは存在そのものが、何かのはずみで獣たちの妨げとなれば……今、互いに向けられている激情と緊張は、邪魔者に向かつて一気に集束し、爆発するに違いない。

しかし、邪魔をしないことを選択しても、空間に満ちる緊張感はずでに耐えがたいほどに肌を焼く。これがさらに高まり、頂点に達し、爆発し、発散するまで待つていられるだろうか。これ以上の圧力に耐えるくらいなら、対決を妨害して、獣たちの報復を一身に受けることを選んでしまつのではないか……。

（ほんとに……ほんとに、どうして、こんな事になつちやつたんだろ……）

人間のいう、気が遠くなるというのは、こんな状態のことなのかもしれない。あまりの緊張に現実感が薄れゆくリヴァイヴァの意識の中を、今までの出来事の記憶がとめどなく浮かんでは駆け巡つた

(あれ！？)

リヴァイヴァの思考回路が何かを捉えた。

それは、ただの機械には不可能な、論理を超えた直感だった。しかし、記憶を細大漏らさず思い出し、必要な部分は拡大までして精査できたのは、生物を模した機械である擬人だからこそ。

これまでの事態の推移。常にこちらの手を封ずるように行動する、あまりといえはあまりなそのタイミングの良さ。そのしぐさの端々に、ほんのわずかに感じ取れる違和感……。

これらの分析結果を元に行なった推論は、百分の一秒足らずで完了し……リヴァイヴァに、ある結論をもたらした。

「あんたら」

今やリヴァイヴァは、恐れ以外のものに突き動かされて、獣たちに声をかけた。その行動にガッツがぎよつと身を強張らせ、止めよと手を伸ばしかけたが、リヴァイヴァは構わず続ける。

「もしかしたら……っというか、絶対に、意識、あるだろ？」

リヴァイヴァを振り返った獣たちは、何のことだかわからない、というように揃って目をしばたかせた。そして

「いやー、やっぱりバレちゃったねえ、どーしよーかねー、あはははは」

「せやから言うたやんか。放つといたかてそのうちバレるし、適当なとこで切り上げたら……っって」

「でもさあ、あんなに怖がってんのをいきなりハイこれは嘘でしたじゃ、あんまりにも芸がなさすぎると思わね？」

「そう言うけどなあ、さつきリヴァイヴァほんまに倒れる寸前やったえ。もしそうならどうする気いやったん？」

「え？ あー、そりゃまあ、その時はその時とゆーことで」

「そんな適当な……。俺からしたら、そっちの方が情けないことになっただんやないかて気いするけどなあ？」

突然、人間のようにぺたんと腰を下ろした獣たちの口から出たのは、あまりにも能天気な会話。

空間を支配していた緊張感はたちまち雲散霧消した。口調のせいばかりではない。異形の姿でありながら、異様なまでに人間くさいその態度、その表情。つい数秒前まで一触即発の睨み合いを繰り広げていたとは到底思えないほど弛みきっている。……あまりの落差にリヴァイヴァもガッツも毒気を抜かれ、声も上げられなかった。そんな擬人たちの様子も知らぬげに、獣たち ではなく半人半獣の姿のままの「彼ら」は、へらへらと会話を続けている。

「うーん、でも最初はうまくいつてたろ？ 2人とも見事に騙されてたよなー」

「そらまあ、こつちも真剣に演技したしなあ」

「あつ、でも尻尾かじることはなかっただろ！ 本気で痛かったぞアレ」

「それを言ったらあんたこそ。人の顔ひっぱたいといてよう言えるわ」

「いや、でもあれはレヴィイたちをからかう都合上やむをえず……」

「そんなんこつちかて一緒やわ。ああまでされて何もせなんだら……」

…今ごろは、一番みつももない結果になってたかもしれへんしなあ」

「うう……」

……徐々に握り締められていたリヴァイヴァの拳が、ぎりつ、と音をたてた。

「こ……こ……こ……この……ツ……」

震えながら横に伸びたりヴァイヴァの片手が、たまたまそこにあつた床拭きワイパーの柄をむんずと掴む。それを見たガッツがおおと呻き、一步、二歩と後ずさり始めたが、もはや彼の行動が、リヴァイヴァの意識にのぼることはなかった。

「こんのツ……アホンダラあああツ……」

指ほどに細い見かけに反し、意外なまでの質量をもつ金属棒が嵐と化した。

「ふぎゃツ……」

「痛たつ……」

突き、薙ぎ、打ち、ぶち当たる。やみくもに振るわれるワイパーに、油断しきっていた獣人たちは、びしっ、ばしっとして続けに打ち据えられて情けない悲鳴をあげた。本来ならば人間並の腕力による打撃など物ともしない分厚い獣人の皮も、リヴァイヴアの逆上をそのまま乗せて荒れ狂うワイパーの前には用をなさない。まして所は狭い室内、人に倍する巨体が仇となり、怒濤の如く襲いくる攻撃を逃れようにも逃れる空間がない。

「まったく、この、バカネコに、バカウシ、ヒトネコにヒトウシのくせに人の気も知らないで、何だつてそんな、このドアホの、バカタレの、アホンダラども……」

「ちよ、ちよつと待てレヴィ、お前言つてることがメチャクチャになつて……ひッ」

スタンプのように絶え間なく突き出されるワイパーの先を、もつれあい、時に一撃を食らいながらも懸命に避けていた2人だったが……リヴァイヴアが、その即席の杖を大きく振りかぶつたのを目にした瞬間、抗議の言葉は喉の奥で押し潰された。

「往生せいやあッ!!」

とどめの一言とともに襲った強烈な薙ぎ払いに、人獅子虎と人牛とはひとまとめに吹っ飛ばされた。

その一部始終を、敷居一つ隔てた台所の物陰からじっと見守る一対の目があった。言うまでもなく、独りこつそりと騒動の場を離れ、台所に退避していたガッツである。

たった今、リヴァイヴアの全力攻撃で吹っ飛ばされた獣人たちは、床に折り重なつてじたばたとあがいている。とは言えそれは戦意ではなく、単に互いの重みから逃れたいだけ。特に、重たい人獅子虎にのしかかられてしまった痩せ黒牛の方は。だろウ。

だが、リヴァイヴアの方はそうではない。じたばたする獣人たちに向かい、なおもぎゃいぎゃいと何事か怒鳴り、はかばかしい返事が返らないと見るや、再びワイパーを振り上げ振り回す。攻撃する方される方、双方の喚き声が台所の向こう側の壁までびりびりと震

わせた。

その騒ぎに紛れるようにして、ガッツはひそかに嘆息する。

この様子では、獣人どもはともかくとしても、リヴァイヴアの怒りが収まらないうちはどうにも手のつけようがない。先ほどの獣たちの睨み合いではないが、下手に割って入れれば馬鹿を見るのは自分だ。

敢えて介入する理由を探すとすれば、この立ち回りによって、室内が致命的損傷を受ける可能性があげられる。しかし、幸いにもガッツの貴重極まりない収集品は 掃除に困るというリヴァイヴアの意見により 今は押し入れに収納されている。少なくとも押し入れの戸が破壊されない限り、フィギュアにもプラモにも画像記録にも危険は及ばない。

また、アパートの他の部屋にも、きつとこの騒ぎは届いているだろう。が、後から持ち込まれる苦情などより、現時点の我が身の安全のほうが緊急度及び優先度は高い。……であれば、有効な戦術はただ一つ。リヴァイヴアの感情が自然に静まるまで待機するのみ。

未だ打ち打たれ阿鼻叫喚を繰り返している3名を見やり、ガッツは見た目だけはもつともらしく呟く。

「……日頃おとなしい者ほど、怒らせた時は何をしかずか分からないものだから」

ひとつこのようなその呟きが、彼以外の誰の耳朶にも 特にリヴァイヴアの耳に触れなかったのは、紛れもなく彼にとっての幸いであつたに違いない。

「触らぬ神に祟りなし - - Far from Jupiter,
far from thunder...?」了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4856e/>

触らぬ神に祟りなし -- Far from Jupiter, far from thunder...?

2010年10月8日15時54分発行